

唐末五代期における城郭の大規模化

——華中・華南の場合——

愛宕元

一 はじめに

二 華中・華南の州縣城

三 結語

一 はじめに

唐代の城郭都市を通観すれば、長安・洛陽の兩京が群を抜いて大規模な平面プランをもっていることは周知のことである。城周六七里の西京長安城（實測値三五、五七〇米）と城周五二里の東京洛陽城（實測値二七、五一六米、南北兩城間の洛河部分を含む）は、隋代に統一帝國にふさわしい都城としてそれ以前の城郭城基に據ることなく、全くの別地に新たにしかるべき都城プランに基づいて造營されたものであって、もっぱら政治的意圖からの築城であれば、都城變遷史の點からは注目すべきではあるものの、秦漢以來の地方行政據點としての州郡城・縣城といった一般的な城郭都市とはやや様相を異にすると言わねばならない。城郭都市を歴史的に連續した存在として見るならば、一般的な州縣城郭の變遷こそがより注目されねばならない。

別掲の表は、關內道・河南道・河東道・河北道・隴右道の華北及び劍南道・嶺南道については、城周およそ一〇里以上

であることが判明するもののみを、山南道・淮南道・江南道の華中・華南では城郭の存在を確認できるもの全てを掲げた。本表で明らかのように、兩京を別格として、唐代で最大規模の城郭は城周四七里の蘇州城で、四二里の太原府城がこれに次ぐ。太原府城は北都として兩京に準じる格附けがなされるから、それに見合った規模と言える。⁽¹⁾以下、四〇里の揚州城、⁽²⁾三二里の幽州城、三〇里の陳州城など、城周三〇里以上と確認できる例はきわめて僅かである。三三里乃至四二里の成都府城、七〇里の杭州城、四〇里の福州城などはともに唐末期に大擴張されたもので、これらの城郭こそが本稿で取り上げようとする対象である。四二里の梁州興元府城は唐代にそのままの規模で機能したかどうか疑わしい。また密州莒縣城の城周四〇里、太原府文水縣城の三〇里、瀛州東城縣城の二〇里など、縣城クラスで並外れて大きな規模をもつものが見られるが、恐らくは前代以來の城郭が一應は繼承されたものの、實際の城居空間は城内のごく限られた部分に過ぎなかったようである。文水縣城では「城甚だ寛大、約三十里たり。百姓、城中に於て水田を種う」⁽³⁾という状態であり、東城縣城も二〇里というのは前代以來の故外城で、唐代縣城としての城居空間は城周五、六里の舊内城に過ぎない。⁽⁴⁾およその目安として府州城クラスで城周一〇里（約五、六〇〇米）前後、縣城クラスではそれ以下である。城周一〇里であれば、假に正方形の平面プランとすれば、一邊二・五里（一、四〇〇米）、城周二〇里で一邊五里（二、八〇〇米）となる。したがって城周二〇里前後及びそれ以上の城郭が大規模城郭と分類出来るであろう。そこであらためて一覽表を見てみると、大規模城郭と見なすべきものがいくつか認められ、それらのほとんど全てが華中・華南の地にあり、かつ唐末五代期に大幅な擴張増修がなされて大規模城郭に變貌していることに氣附く。以下にそれらの大規模城郭について、その地域性、擴張増修の時期、構造上の特徴を中心に検討することにしりたい。

二 華中・華南の州縣城

(1) 荊州江陵府城

もと中隔壁があつて南北兩城に分たれていた。南城は蜀漢の關羽が築いたもので、東晉の桓溫が一城とし、唐城は恐らくそれを繼承したものの如くで、城周一八里であつた。⁽⁵⁾唐後半期のことと思われるが、南門が甕城構造となつていたことが知られる。⁽⁶⁾唐末に王仙芝叛亂軍がここを攻撃した際、羅城を陥されて子城を固守したもの、三〇萬戸の城内人口の三〇四割が失なわれたという大破壊を受けた。⁽⁷⁾

五代初、この地に據つて自立した高季興は、一〇數萬人を動員して破壊の著しい羅城（外城）を大増修するとともに、城壁上に多數の敵樓や櫓を設けて防禦強化を圖つた。とくに「西面羅城を増築」したとあることから、それ以前の子城西壁と羅城西壁とが共用されていたのを、子城を完全に羅城内に取り込んだこと、つまり羅城が西側に擴張されたことが知られるのである。⁽⁸⁾高季興による擴張増修で注目すべきは、羅城が全て甕城とされたことである。南に長江をひかえ多數の水系が圍繞する江陵の地にあつて、甕城構造は攻城對策であるだけでなく、増水時の城壁保護のためにも必要であつたからである。高季興は甕城工事のために五〇里四方の古墓を全て暴かせて、墓室の構築に用いられていた甕を剝ぎ取つたといふ。⁽⁹⁾このことは、版築及び甕の焼成に最適である黃土地帶ではないこの地での築城の困難さを物語るものである。

(2) 廬州城

唐代の廬州城に關しては、咸通一〇年（八六九）に龐勛叛亂軍が徐州を攻陥し占據した際に、亂對策の一環として羅郭が修築されたことが知られる以外は不詳である。五代十國初の楊吳天祐六年（九〇九）に至つて、楊吳の實權を握る徐溫（南

唐先主)の命で廬州刺史張崇が行なった大擴張と大幅な防備強化策を具體的に知ることが出来る。⁽¹⁰⁾この増修で廬州城の城周は二六里一七〇步(約二四・八キロ)・城高三丈(九・三米)という大規模なものとなった。五五ヶ所の竈で焼成した一尺三寸・六寸大の甃數萬片で城身をおおった甃城構造とされたことは、防城強化の面で重要である。但し、これだけの城周と城高をもつ城壁であれば、數萬片の甃ではとうてい全體を甃城構造には出来なかつたはずである。また城濠は幅七〇・六〇丈(二二八・一八七米)・深さ八丈(二五米)のものが新たに掘削されたと云うが、城高との関連から見ても一オーダー誇大であろう。少なくとも濠幅の單位丈は尺の誤りと見なしてよい。新築羅城には一三門が開かれ、西門の獨山門・瓦步門の名が知られる。またいくつかの橋梁の架け換えがなされたうち、東正門橋・崇化門橋・懷德門橋の名が見えるが、羅城の門名か子城の門名かは判然としない。防禦施設としては、城壁上に設けられた四四ヶ所の大弩樓がある。これは『通典』⁽¹¹⁾や『武經總要』等に言う弩臺に類するものであろう。およそ三三六米毎に設けられた大弩樓には、射程が長く殺傷力の大きな大型弩を操作する射手が多數配され、城下真近かに迫る敵兵に對してより、むしろやや距離のある敵兵に效果的な威力を發揮するものであった。この大増修工事の最中の九〇八年十一月、吳越錢鏐の南からの侵攻に呼應して、後梁の寇彦卿が五萬の兵を率いて北から淮河を渡って廬州城を「直ちに城湟を渡り、長梯を女牆に掛け、霜矛を鵲堞に擯む」という肉迫攻撃を加えてきたこと、⁽¹²⁾修築後もない九一三年にも、賀環・王彥章等の率いる四萬の後梁軍が廬州羅城の西側に「延瓦敷里」に及ぶ攻撃陣を布きながら、「堅墉漸く備わり、濬洫已に周し。巨堞屹として山のごとく横たわり、大弩發して雷のごとく吼う」という萬全の防禦によって退けたことなどからも判るように、淮河南岸の壽州とその南に位置する廬州とは、淮南攻略をしばしば試みる後梁にとって陥さねばならない戰略要地であった。逆に言えば、華北軍閥政權の南侵を淮河の線で阻止し江淮の地に自立政權を維持しようとする楊吳にとっても死守せねばならない要衝が廬州であった。

廬州城の擴張と防備増強は、まさにこの時期の情勢に對應するものであったのである。

(3) 潤州城

潤州は大運河の江南での起點で、江北の揚州とともに漕運上の一大要衝であり、唐代後半には浙西觀察使の使府が置かれた。潤州城は子城と羅城とから成る。子城は孫吳期に築かれた軍事要塞の鐵瓮城を繼承したもので、城周六三〇步（一里二七〇步、約九八三米）という小規模なものである。⁽¹⁴⁾ 羅城の存在は八三〇年代の浙西觀察使王璠が「潤州の外隍を鑿つ」とあるのが初見であり、唐代前半期の潤州城は鐵瓮城だけであった可能性が強い。浙西藩鎮期に羅城が築かれて鐵瓮城が子城と化したと考えられる。羅城規模が判明するのはやはり唐末で、八八〇年代に鎮海軍（浙西）節度使周寶が増修し、城周二六里一七步（約一四・六キロ）・城高九尺五寸（約三米）という大規模なものになった。⁽¹⁶⁾ 黃巢の亂後の混亂に乗じてこの地で自立化を圖った周寶であったが、光啓三年（八八七）に兵亂で放逐され、杭州から北上して蘇州・常州・潤州という運河線の確保をねらう錢鏐が一時的に占據するものの、ついで淮南楊行密によって常州・潤州は奪われ、吳と吳越の國境線が事實上定まることになる。唐末の群雄割據のなかでその爭奪の的になったのが潤州の地であり、その比較的早い時期における群雄本據の擴張の例が潤州城である。近年、城周約五〇〇〇米の東晉南朝期の晉陵郡羅城が確認され、唐代潤州羅城は上記晉陵城に西接して築かれていたことがほぼ明らかとなった。⁽¹⁷⁾ そして明清以來の現鎮江城と少なくとも東壁は重層している可能性も指摘されているが、乾符以前における唐羅城の規模は依然として不詳である。ただ城周六三〇步の子城は東晉羅城の子城としてその西北に外接するとともに、唐城の子城としてもその東北部に接して存續利用された。現鎮江城東北に突出した鐵瓮城は、ほぼそのままの形で残存している。また唐城には長さ一二里七〇步・高さ三丈一尺の東西夾城が附設されていた。⁽¹⁸⁾ その長さから見て羅城の東・西壁に沿って設けられていたことは明らかで、東夾城は東晉羅城との重層が豫測されるが未確認である。夾城は月城、甕城、羊馬城等と同じく、城門及び城壁防禦を強化するための施設であるから、唐末の鎮海節度使周寶による羅城擴張時、あるいはその後一時占據した錢鏐、ついで潤州を確保した楊行密

のいずれかの手になるものと考えられよう。九三七年の楊氏吳から徐氏（李氏）南唐への政權交替に際し、南唐主徐知誥は吳主楊溥から讓位されると、潤州子城（牙城）を丹陽宮と稱して吳主の居所と定めた。⁽¹⁹⁾實體は吳主を子城内に軟禁したものに他ならない。

(4) 潤州上元縣城（金陵江寧府城）

六朝歴代の都城建康の地である。隋の平陳時に大破壊を被り、唐代には潤州に屬する上元縣治となるが、縣城の規模等は全く不詳である。唐末にやはり群雄勢力が入れ代りこの地に據り、最終的には楊吳の領域に組み入れられた。⁽²⁰⁾十國吳の順義年間（九二二～二六）、吳の實權者徐溫は六朝舊城の南に新たな城郭を築き、ついで徐知誥が大擴張して城周二五里四歩・城高二丈五尺・上厚二丈五尺・基厚三丈五尺とし、さらに基厚四丈一尺の内臥羊城（羊馬城の一種か）を設けて防禦力を一段と強化した。⁽²¹⁾九三七年の受禪直後には、金陵江寧府と改稱して揚州江都府から國都を遷し、舊子城（牙城）を宮城として都城の體裁を整えた。この牙城が恐らくは六朝建康城内の臺城かと考えられる。⁽²²⁾吳の領域をそのまま繼承した南唐ではあるが、その獨自性を明らかにせんとするためになされたのがこの江寧府への遷都である。

(5) 常州城

常州城もまた唐末以降に順次擴張されて三重構造の大規模城郭となる。それ以前の規模や構造については不詳である。景福元年（八九二）、この地を押えた淮南楊行密によって、まず城周二里三一八歩・城高二丈一尺の城郭が新建された。これが後に内子城と呼ばれるものである。ついで楊吳成立後の順義年間（九二二～二六）に、城周七里三〇歩・城高二丈八尺・基厚二丈餘の外子城が内子城を西北隅に取り込む形で築かれた。さらに天祚二年（九三六）には、城周二七里三七歩・城高二丈・基厚二丈の羅城が外子城を西北隅に取り込んで築かれた。⁽²³⁾常州の地は楊氏吳と錢氏吳越の國境線にあり、吳に

とつては運河沿いに蘇州からさらに北進せんとする吳越に對するきわめて重要な戰略上の要衝に當っていたことが、常州城の度重なる増修となつたのであり、五代十國期に大規模化する城郭の一典型と言える。五代末の後周世宗による對南唐作戰で常州外郭、つまり羅城攻防が激しく展開されている。⁽²⁴⁾

(6) 常州江陰縣城

楊吳の天祐一〇年(九二三)に城周一三里の城郭が築かれ、南朝梁以來、隋唐期に繼承されてきた縣城は古城と呼ばれて新城内に包攝され子城化した。⁽²⁵⁾縣城クラスで城周が一〇里を越える大規模なものとされたのは、この地が長江南岸に位置し、前面の江中に東洲と呼ばれる巨大洲があつて、錢氏吳越が長江江口より溯上して東洲を経由して吳領、とくに常州方面に侵入するルートに當るといふ戰略上の要衝にあるからである。⁽²⁶⁾

(7) 蘇州城

『吳郡志』・『吳地記』といった文獻や石刻の「平江府圖」等によつて、唐代城郭の規模や構造を具體的に知ることが出来る。少數ない例が蘇州城である。大城(外郭城、羅城)の城周は四七里、小城(内城)は一〇里あり、兩京を除き、唐代府州城中で最大規模をもつ。⁽²⁷⁾五代十國期には吳越領となり、楊吳との國境に近接する地であつたが、この時期に擴張された形跡は認められない。すでに規模としては十分な大きさであり、大運河を利用した大城濠で圍繞されていたからであるが、防城施設等は大幅に増強されたであろうことは十分に推測できる。

(8) 杭州城

隋の平陳後、楊素によつて城周三六里九〇歩の城郭が築かれた。この時期のものとしては異例に大規模である。大運河

の南の起點として、統一後の江南支配の一大據點としての新建である。唐代杭州城はこの隋城をそのまま踏襲したものである。⁽²⁸⁾ 唐末に杭州を本據とした錢鏐は、大順元年から乾寧四年（八九〇～九七）に及ぶ増修工事で、南北に大幅に城域を擴張して城周五〇里の夾城を築いた。これとほぼ併行して、乾寧二年から四年（八九五～九七）の間に、西北部に突出した夾城部分を廢する一方、東壁をさらに東進させ南部夾城部分と接續させて、城周七〇里という巨大な羅城を築いた。西北夾城を廢することで防禦上の弱點を克服し、南に擴張することで錢塘江を事實上の城濠に利用したのである。この時に動員された勞働力は二〇萬の民夫と數萬の一三都軍士という膨大なものであったと記録されている。⁽²⁹⁾ この羅城に包攝された内城（中城）と呼ばれるものが、唐代の杭州城であったと考えられる。羅城壁上には百歩毎に敵樓が設けられるなど、防禦面での配慮も十分になされたものであった。⁽³⁰⁾ 單純計算では、ほぼ二五〇箇所の敵樓設置ということになる。

(9) 杭州東安鎮城

唐末における軍鎮クラスの城郭を一つだけ紹介しておこう。東安鎮は、杭州西南一三〇里に位置する管下新城縣内の軍鎮である。⁽³¹⁾ その設置時期は不明であるが、恐らく唐後半の浙西藩鎮期であろう。唐末、杭州を本據とした錢鏐が都將杜稜に命じて城周二五〇〇步（六・九四里、約三九〇〇米）の羅城を築かせている。⁽³²⁾ 景福元年（八九二）のことである。新建されたのが羅城と呼ばれるからには、これ以前の東安鎮には小規模ながら城壁を有していたことをうかがわせる。城周が七里近い城郭規模は、中の上クラスの縣城に匹敵するものである。この時期の錢鏐は、後述するように、もっぱら杭州一州域を確保するだけの存在で、四鄰すべては敵對勢力であった。南鄰睦州には陳晟が據り、錢氏の手に入るのは九〇五年のことである。北鄰湖州には李師悅が據り、八九七年に錢氏の手に歸す。西北鄰宣州は三年前の八八九年に淮南楊行密が確保し、西南鄰歙州も八九三年に楊氏が押えている。まさにこのような情勢下で東安鎮に鎮としては異例に大規模な城郭が築かれているのであり、築城の背景は自明であろう。事實、築城直後の乾寧二年（八九五）十月には、楊行密が寧國（宣州）

10 湖州 城

節度使田頴等を派遣して杭州域に大規模な侵犯を行なっているが、「三四年ならずして、楊行密、淮南の節を持し、稱盜を以て豕突獬衝し、我が疆境を擾す。而して東安郡（註）尤も其の忌む所と爲る。行密、（潤州團練使）安仁義の精銳を減じ、（宣州節度使）田頴・（歙州刺史）陶雅の敢勇を分ち、以て東安城を攻む。樓櫓空に翔り、矢石交ごも迸る。翊日、我が軍、其の城に憑き、賊將を城外に斃すこと數四、溝塞がり塹堙り、悉く以て色を等しうす。是れより群寇復た南を圖るの意有らず（33）」と見えるように、楊行密の南侵を撃退するのに羅城の成った東安鎮が重要な役割を果たしたのである。

唐初武德四年（六二二）に築かれ、唐末景福二年（八九三）に刺史李師悅によって重修された。羅城の城周は二四里となり大規模であり、唐末重修時に擴張されたものと見るべきであろう（34）。湖州刺史李師悅はもと武寧（徐泗）藩鎮の將で、黃巢の亂鎮壓過程で武功をあげて成り上った武人である。淮南楊行密と兩浙錢鏐という兩雄の間にあって、楊行密に款を通じつつ割據した群雄の一である。湖州城の増修は、唐末における中小群雄の本據のそれとして注目すべき事例であり、乾寧三年丙辰（八九〇）秋七月の題記のある楊夔「烏程縣（湖州郭下縣）修建廨宇記」（35）に「縣の外城を砌すること凡百餘雉。云々」と見え、隴西公、すなわち李師悅の意を承けた烏程縣令余某の事跡を記し、羅城が輒城とされ防備力強化の一端を知ることが出来る。その直後の乾寧四年（八九七）に錢鏐が湖州の地を確保し（36）、淮南楊行密との勢力圏は蘇州・太湖・湖州の線ではぼ定まり、湖州は兩浙錢氏、すなわち後の吳越にとって北の吳・南唐に對する最前線としてきわめて重要な戰略要地であり續けることになる。湖州城の防禦施設に關しては、古地志によってさらにいくつかのものが知られる。まず城壁上には白露舎が設けられていた。『武經總要』等に見える非常時における戦具補充庫兼防火用具庫である白露屋と同じ施設であろう（37）。南門安定門は甕門構造とされ、城壁面に「壅塞之處」が數箇所設けられていた。これは城壁外をカムフ

ラージュした暗門のことであろう。これら白露舎をはじめとする防城のための諸施設は、唐末の湖州刺史李師悅による増修以後、錢氏吳越の領有期に順次増強されていったものと考えてまず間違いないだろう。そして宋初の太平興國三年（九七八）に、吳越が宋に降服するや、これら湖州城の強固な防備施設のほとんどは撤去されてしまうのである。⁽³⁸⁾

(1) 睦州城

唐初の睦州治は新安縣城（宋代淳安縣）に置かれ、「東西南北、縱横纔かに百餘歩」とあることから判るように、城周わずか一里四〇步餘りの小城で、城内は倉庫・刺史官舎・曹司官宇だけでほぼ埋め盡されてしまい、司馬以下の屬僚及び一般住民はみな城外南を東流する新安江沿いに居住せざるを得ない有様であった。かつ連年のように發生する新安江の氾濫で城内はその度毎に浸水するという状態であったがために、萬歲通天二年（六九七）に東一六五里の建德縣城に州治が移された。⁽³⁹⁾ この新治の睦州城の規模は不詳であるが、南宋期の城周三里という子城がそれであるらしい。唐末の中和年間（八八一〜八五）、餘杭鎮（邊）使陳晟が州刺史を放逐してこの地を占據し、⁽⁴⁰⁾ 城周一九里・城高二五尺・（基）厚二丈五尺の羅城を築いた。⁽⁴¹⁾ 舊睦州城を子城として取り込んだものと考えられる。陳晟の場合も、相對立する淮南楊行密と兩浙錢鏐という二大勢力の間にあって、巧みに睦州を中心とした地域支配を志向した中小群雄の一典型であり、それ故にこそ本據睦州城の大幅な擴張と防備強化を圖ったのである。しかし、その子陳詢の代の天祐二年（九〇五）に錢鏐の攻撃に屈し、陳詢は淮南に亡命し、睦州の地は錢氏の領有に歸したのである。⁽⁴²⁾ 北宋末の方臘の亂後に「重建」された城周一二里二步という宋城は、宋初の城基に據って「重建」されたものであろうから、吳越の降服でこの地が宋の版圖となった際に一回り小規模なものに縮小改築された例に數えることが出来るであろう。

(12) 越 州 城

城周一〇里の子城は隋の楊素によって築かれたと云うから、⁽⁴³⁾羅城が築かれる以前の隋唐期の越州城がこれであろう。唐末乾寧三年（八九六）の越州城攻防に際して外郭と牙城の存在が見えており、⁽⁴⁴⁾やはり唐後半以降に舊城を子城化する形で外郭羅城が築かれたことは確実である。その規模は不詳ながら、宋熙寧年間（一〇六八～七七）のそれが城周二四里二五〇歩であることから、⁽⁴⁵⁾唐末羅城の規模をある程度推測することが出来る。また後世の越州城圖では、子城は羅城内西北の小さい丘陵臥龍山を中心に位置しており、⁽⁴⁶⁾多数の水系が交錯するこの地での子城の立地を考慮するならば、隋唐城、つまり越州子城は基本的に後世まで踏襲されたと見なし得る。ところで唐末における越州城の攻防というのは、その時点では浙西を領有するだけであった錢鏐が越州城に據る義勝（浙東）節度使董昌に對して行なったものである。この直前に淮南楊行密によって一時蘇州を奪われた錢鏐にとって、その本據杭州の後背を脅かす浙東董昌はどうしても除かねばならない存在であった。ここに越州を陥した錢鏐は、兩浙の地を領有することに成功したのである。

(13) 越州諸暨縣城

開元・天寶年間に東北門と西南門が造られているが、城壁が存在したかどうかはこれだけでは確認出来ない。唐末天祐初（九〇四）に錢鏐によって修築された城壁は、宋代には廢されてしまった。宋城の規模は城周二里四八歩・城高一丈六尺・基厚一丈であり、⁽⁴⁷⁾唐末から吳越期の規模はこれより一回り大きかったはずである。

(14) 越州新昌縣城

唐末に錢鏐によって剡縣東境一三郷を析いて新設されたのが新昌縣で、縣治は石牛鎮に置かれた。殖産興業等による人

口増が新縣設置の一因であろう。鎮から縣へ昇格された比較的早い時期の事例である。縣城規模は城周一〇里・城高一丈・基厚一丈三尺と縣城としてはかなり大型に屬する。⁽⁴⁸⁾鎮の發展が急速に進行したことを示している。

(15) 衢州 城

「衢の城は龜山崢嶸嶺の上に成る」⁽⁴⁹⁾と見えるのが唐城に關する唯一の記述である。唐末に錢鏐が衢州羅城使を派遣してこの地への勢力擴大を圖っていることから、羅城の存在を知ることが出来る。⁽⁵⁰⁾明清城では城内の西北に崢嶸山、その東南に龜峰山を包攝して⁽⁵¹⁾おり、城郭の規模はともかくとして、位置は唐城と基本的に變化のないことが判る。

(16) 溫州 城

十國初期、錢鏐によって内外城が増修され、城周一八里・城高三尋餘（二一・二四尺）・基厚一丈五尺・上厚五尺といふかなり大型の城郭となつた。⁽⁵²⁾一八里というのは當然外城であろう。内城が唐城であつたと考えられる。錢氏による領内要衝の支配を強化するための措置であることは明らかである。

(17) 台州 城

城周一八里の外城と四里の内城から成る。宋初の吳越併合時に城壁が破壊されたことからすれば、⁽⁵³⁾外城の規模は唐城を錢氏が増修擴張した結果だと見てよい。

(18) 明州 城

明州は、開元二四年（七三六）に越州東半の地を析いて新置された州である。廣德元年（七六三）の袁晁の亂で攻陥破壊

されたが、長慶元年（八二二）に再築される。⁽⁵⁴⁾ この明州城は城周四二〇丈（二里二二〇步）という小規模なもので、⁽⁵⁵⁾ 浙東海濱の地とは言え、下クラスの縣城規模に相當するに過ぎない。唐末にこの地の土豪勢力を結集して自衛集團の長にした上った黃晟は刺史を自稱し、西鄰越州の義勝（浙東）節度使董昌に臣從する姿勢をとりながらも地域支配を志向した中小群雄である。そのために唐城を子城として取り込む形で城周一八里という大羅城を築いたのである。⁽⁵⁶⁾ 西北からの餘姚江と南西からの奉化江が合流して甬江となる合流地點に、北及び東をそれら二江を天然の城濠として唐末に築城された明州羅城の平面プランは、現在の寧波市圖からも明確に識別出来る。のちにこの地は錢氏吳越の領有に歸し、城郭防禦策がさらに強化されている。

(19) 明州定海縣城

甬江が海に入る地點に立地するのが定海縣である。各種の海船が甬江を溯上して明州に至る入口であるとともに、海鹽產地でもあることから、唐代後半以降、その重要度が高まって望海鎮という軍鎮が置かれた。唐末に錢氏が鎮から縣に昇格させ、城周四五〇丈（二里一八〇步）の城郭を築き、三〇〇餘丈（一里二四〇步）の城濠を掘削した。⁽⁵⁷⁾ 縣への昇格と縣城新築は、交易や製鹽業の振興による人口増とともに、錢氏吳越にとって海防上の必要性があったからだと考えられる。

(20) 虔州城

唐末の光啓元年（八八五）、この地の群雄盧光稠が虔州を陥して自ら刺史と稱し、初めて築城した。⁽⁵⁸⁾ 恐らくこれ以前は城壁がなかったものと考えられる。南宋期の城郭規模は、城周一三里・城高三尋（二一・二四尺）・基厚一・五尋であり、⁽⁵⁹⁾ 唐末盧光稠による築城規模の大概を推定出来る。江南に楊氏吳、嶺南に劉氏南漢が次第に勢力圏を確立しつつあるなかで、盧光稠は虔州及び嶺南の韶州二州の地に據って自立し、馬氏楚を介して華北後梁に入朝臣從して自己保全を圖った。⁽⁶⁰⁾ その

本據虔州城の築城は、このような情勢下でなされたものである。この地は九一八年にようやく楊吳に併合されるが、この時の虔州城攻撃に楊吳軍は大いに手こずっていることから⁽⁶¹⁾も、きわめて強固な防禦施設を備えた城郭であったことがうかがえる。

(2) 袁 州 城

唐初武德四年（六二二）に城周四八四步（二里二四步）・城高二丈の州城が築かれた。北面は渝水（袁江）を天然の城濠とし、他の三面には幅七丈の城濠が掘削された。城壁外面は輒でおおい、城壁上の白露屋は全て瓦葺で耐火性が強化された。⁽⁶²⁾唐初における江南の州城としては、城郭規模は小さいものの、城濠の幅員や防禦施設の充實が注目される。翌五年に平定される隋末以来のこの地の南朝系群雄蕭銑に對する軍事目的に基づくものであることは間違いない。唐末乾寧二年（八九五）、袁州刺史揭鎮によって城周一五〇〇餘丈（八里二〇步）の羅城が築かれ、同時に外城が増築された。⁽⁶³⁾この羅城と外城の區別が判然としない。ついで袁州刺史となった彭彥章が、天祐初（九〇四）頃に羅城をさらに東西に擴張した。⁽⁶⁴⁾彭彥章はこの地方の赤石洞蠻と呼ばれる原住少數民族の首長で、弟の彭玕は南鄰で吉州刺史を自稱し、兄弟で袁州・吉州の地に據った勢力である。後述の撫州刺史危全諷と連合して楊吳の江西での南進を阻止するために、湖南の馬氏楚とも連繫するなど、唐末五代初において江西南部にある種の少數民族自立を圖った存在として注目すべき勢力であった。⁽⁶⁵⁾九〇九年七月、吳軍は撫州危全諷、ついで袁州彭彥章を降し、吉州・信州・饒州等を制壓した。翌八月には、既述の虔州盧光稠も吳軍に降り、吳は江西南部をほぼ完全に掌握した。⁽⁶⁶⁾袁州城は吳領になってさらに増修が加えられる。西鄰楚と境を接する要衝であるからである。吳の乾貞二年（九二八）には羅城諸門外に鋪柵が設けられ、城門防禦が強化された。⁽⁶⁷⁾鋪柵とは、月城・甕城・羊馬城に類する木柵であろう。太和五年（九三三）には羅城が二百餘間増築され、城濠五〇〇餘丈も濬泄された。⁽⁶⁸⁾吳を繼承した南唐の保大二年（九四四）、この地に鎮した劉仁贍は城内官宇の整備を行なうとともに、「仍ほ羅城を添築

し、濠塹を開闢し、城壁を全て甃城に改修して「鐵甃之堅」たる防禦強化を圖っている。⁽⁶⁹⁾南宋期の『袁州圖經』に「城周回七里二十步、高三丈八尺。子城周回一里一百二十步、高三丈七尺。北は袁江を枕とし、三面濠深四丈」⁽⁷⁰⁾と見える宋城の規模から、宋がこの地を併合した後に羅城が一まわり縮小されたことが判り、宋城子城は城周規模が完全に一致することから、これが唐初の袁州城で、唐末の羅城新築時に取り込まれたことも明らかとなる。

② 撫州 城

唐末光啓三年（八八七）に撫州刺史危全諷が大幅に増修し、城周一五里三六步・城高一丈二尺・基厚二丈五尺・門數八の大規模な羅城が築かれた。羅城に西接した城周一里二二歩の子城が元來の唐城であろう。⁽⁷¹⁾危全諷は撫州南城縣の人とあるから、在地土豪であろうか。黃巢軍が去った後の混亂の中で、中和二年（八八二）、彼は撫州に據って刺史を自稱し、弟危仔倡を東鄉信州（饒州上饒縣）に送り込んでその地に據らしめ、江西觀察使鍾傳の統制から離脱して自立を圖った。五代十國になると、楊吳の南への勢力擴大に抗して錢氏吳越に一時接近し、ついで袁州刺史彭彥章・吉州刺史彭玕と連合し、さらに馬氏楚の援軍をも得て、江西での楊吳の前進據點洪州を攻略したものの、敗北して擒えられた。九〇九年七月のこと、ここに江西全域は楊吳の領有に歸した。⁽⁷²⁾十國初頭での吳・吳越・楚・南漢の勢力圏が固まる過程での、江西南部における比較的有力な群雄であったのが危全諷であり、彼が本據撫州城を大擴張したのは當然であったと言える。

③ 撫州南城縣城

唐末大順二年（八九一）に汝南公南康太守某によって築かれた羅城規模が判明する。すなわち、城周一三里・城高二雉（二丈）・基厚一丈六尺、城門は東西に八門、南北に各一門が開かれ、城壁上には（白）露屋一一三七間、敵樓三三箇所が設けられるという、縣城としては異例に大規模で、かつ強固な防禦施設を備えたものであった。この時期の南康太守、つ

まり虔州刺史は既述のように盧光稠であるが、この羅城新建は彼の手になるものか断定し難い。盧光稠だとすれば、本據虔州から東北に接する撫州の南半、南城縣域にまで彼の勢力圏が及んでいたことになる。あるいは撫州の危全諷、洪州の鍾傳らの配下であった人物である可能性も排除出来ない。しかしいずれの手になるものであっても、このような縣域クラスの大規模化は、これまで述べてきた虔州・袁州・撫州・吉州・信州等といった江西中部・南部における群雄割據の複雑な情勢と密接に關連したものであることは言うまでもなからう。

24 宣 州 城

晉代の初築で、隋の平陳直後に整備された⁽⁷⁴⁾。唐代の宣州城はこの隋城を承けたものであろうが、その規模等は不詳である。規模が判明するのは十國期になってからである。淮南楊行密が宣州を奪取するのは龍紀元年（八八九）のこと⁽⁷⁵⁾で、兩浙錢氏と境を接する立地から、有力部將を配して備えとした。ところが、これら部將が次々と宣州に據って叛亂を起し、數次に及ぶ攻防戦で宣州城は大きく破壊されるにまかされた。九〇三年の寧國（宣州）節度使田頔、九〇五年の宣州觀察使王茂章、九一二年の宣州觀察使李遇らの連續した叛亂がそれである。田頔はさらなる領域擴大を強引に推進しようとして、既得領域の保全を第一とする楊行密に抑えられた不満から、王茂章は楊行密没後を承けて嗣位した楊渥との不和から、李遇は徐溫の專權に對する反撥からそれぞれ叛亂を起したのである。九五六年に至って、宣州巡檢使柴克宏が大幅な増修を加え防禦力を強化した⁽⁷⁶⁾。後周世宗による南唐の淮南江北奪取作戦の最中のことであるから、城郭修築の意圖は自明であろう。ついで九六三年に、さらなる増修がなされている。南唐が宋に併合される一〇數年前のことで、舊城を大擴張して城周一〇里一九三步の新城が築かれた。長さ八九四丈（約五里）・深さ三丈有餘の城濠が掘削され、防禦施設として城壁上に八箇所の大樓、その他多數の敵樓や橋道が新設された⁽⁷⁷⁾。この年、宋は高氏荆南及び馬氏楚を併合して長江中流域を制壓し、先南後北策を着實に推進しており、淮南江北の地を既に失った南唐にとって、宣州の地は國都江寧府の上游に位

置するきわめて重要な要衝であったのである。

25 歙州城

大中九年（八五五）に城周一里四二步・城高一丈八尺・基厚一丈三尺五寸の子城が修築され、中和三年（八八三）に城周四里二步・城高一丈二尺の羅城が修築された。唐末中和以前の子城が元來の歙州城であったと考えられる。中和五年には、羅城はさらに南北に擴張されて城周九里七步と舊に倍する規模とされた。黃巢の亂後の混亂に對處するための措置であることは言うまでもなからう。これより先、咸通六年（八六五）に、羅城西北外に堤防が築かれている。夏秋にしばしば溢水を繰り返す溪水から羅城基部を守禦するため、光化年間（八九八～九〇一）にはこの堤防を城基として城周四里餘りの城壁が築かれた。新城と呼ばれるものである。⁽⁷⁸⁾唐末五代初期、土砂を盛っただけの堤防城基の脆弱さを全面的に改修し、「今、當に深さ一仞を發し、砂石を抉去し、實すに精壤を以てし、重ねて鎮築を加うべし」という新城の改築工事が三城使等の監督の下で行なわれた。⁽⁷⁹⁾三城使とは、子城・羅城及び新城の管理維持を職掌とする使職である。淮南楊行密が歙州を確保するのが景福二年（八九三）であり、光化年間における羅城西北堤防上の新城築城とその後の新城大改修は、ともに楊行密の支配下になってからのものである。この時期における彼の最大のライバルは、歙州に東鄰する杭州を中心に勢力擴大を圖りつつあった浙西の錢鏐であった。

26 歙州婺源縣城

開元二六年（七三八）の新置縣で、城壁三面を婺水が圍繞する立地であった。⁽⁸⁰⁾唐末には漆や茶の集積地として發展著しく、楊吳の領域に組み込まれると、縣城城壁上に鼓角樓や挾城樓が設けられた。楊吳太和年間（九二九～三四）には、北鄰の祁門縣、西鄰の饒州浮梁縣・德興縣と本縣を合せた四縣の各種商稅、とくに茶稅徵收を統轄するために婺源縣城内に都

制置使が置かれ、軍隊も駐屯して、この地域での流通経済と治安維持の中心としての地位を確立する。そして南唐昇元二年（九三八）に、城周九里三〇步（一作一〇里）・城高一丈八尺、しかも城内に東南（一作西）兩市を開設するという、縣城としてはきわめて大型の新城が築かれた。⁽⁸¹⁾ 唐末五代期における地場産業の勃興とその発展に伴って大きく變貌する江南の縣城の姿がここに見られる。これまで見てきた軍事面を主眼とした州縣城の大規模化とはやや異なった背景に因る例である。

27 池州城

永泰二年（七六六）に宣州西半を析いて設けられた新置州である。⁽⁸²⁾ 黄巢叛亂軍が廣州を遺棄して北への流寇を再開し、乾符六年（八七九）十一月には江西・浙江の饒・信・池・宣・歙・杭等一五州が大きな被害をうけた。池州城は「屋宇城壁の事無く、市井人物の類も無し」という徹底的な破壊を被ったが、中和元年（八八一）に池州刺史として赴任してきた寶滴によって再建され、「既に城壁あり、則ち人は以て寇を避くるを得、靡署あり、則ち物は以て帑を營むを得たり。鼓角器械、廳堂簷廡、自ら濠塹の四隅に周り、其の間のまさに建置すべき者、一として闕く所無し」⁽⁸³⁾と防禦施設を含めた守城強化が圖られた。翌年に寶滴は宣歙觀察使として宣州に移るが、同年十二月、黄巢叛亂軍からの降將で和州刺史となつた秦彦によって宣州を逐われ、かつ池州もまた秦彦の勢力下に置かれることになった。⁽⁸⁴⁾ 黄巢軍が北へ去つた後のこの時期、宣州・池州地方では群雄諸勢力のめまぐるしい攻防が展開され、楊行密が池州の地を確保するのはもう少し先のことである。

28 福州城

福州城も唐末になつてはじめて具體的な姿が判明する。黄巢叛亂軍が福建を流寇して南へ去つた直後の中和年間（八八

一八八五、福建觀察使鄭鑑によって東南隅の擴張がなされた。ついで文德元年（八八八）に陳巖がさらに擴張増修して輒城としたが、その規模は城周二三三步（〇・六五里）という小さなものに過ぎなかった。⁽⁸⁵⁾ 陳巖は建州の人で、黃巢軍の福建流寇に際して九龍軍という自衛集團を結成して鄉村防衛に活躍し、中和四年（八八四）に鄭鑑に代って福建觀察使となった人物である。⁽⁸⁶⁾ 福州城の大増築がなされるのは、閩國の建國者王審知によってである。王潮・王審知兄弟は、秦宗權の暴政を避けて河南光州から江西を南下し、江・洪・虔州を経て福建南部の汀・漳州を抜くのが光啓元年（八八五）、翌年には海岸線を北上して泉州を陥し、景福二年（八九三）には福州をも制して、王潮は福建觀察使を稱し、福建のほぼ全域を押えて閩國の基礎を築いた。乾寧四年（八九七）、兄王潮の死を承けて福建觀察使となった王審知がその本據福州城の大々的な擴張増修を行なうのが天復元年（九〇一）のことである。まず舊城を取り込んで城周二六里の羅城が築かれた。一五尺も掘り下げて城基を固め、版築工法で造成された城高は二〇尺、基厚は一七尺、外壁は一五〇〇萬斤の輒で葺かれた輒城構造とされた。この膨大な輒数が決して誇大でないことは、後述の南宋期桂州城の例からも明らかである。羅城上には廊と呼ばれる建造物が一八一〇間設けられ、廊の突出部、つまり馬面機能に相當する部位では敵樓とされ、そのうちの二三箇所は重層構造であった。城壁直下への視界を良くして城下に對する攻撃上の死角を少なくするための工夫である。敵樓を含む廊の設置間隔は單純計算で五・二步（約八米）毎となり、驚くほど緊密である。また廊には一定間隔毎に三六箇所の更鋪が設けられた。「鼓を以て更を司る」ための施設である。通常では時刻を知らせる鼓樓や鐘樓等は城内中心部に置かれるものであり、羅城上にこのように多數の更鋪が設置されたのは、非常時における守城指揮の迅速な傳達等を想定したものであることは明らかであろう。城隅には角樓六箇所が設けられ、そのうち二箇所は遠望のきく三層構造とされた。城隅角樓六箇所とあれば、城壁の一部屈曲を示唆するものである。城門は各面二門で計八門、すべて鐵製門扇と銅製局^{かんね}で、各門上には門樓が設けられた。城郭防禦上の最大の弱點は城門部分であり、その對策がここに見える。とくに火攻を想定した城門強化である。その他、九箇所の暗門、三箇所の水門が設けられ、うち二水門は上下に移動する門柵とした懸門構

造で、帆柱を倒せば船の出入が可能であった。さらに羅城の南北外側に夾城を築き、これを南月城・北月城と言った。南月城上には廊一〇一三間・敵樓四九箇所が設置され、二門・八暗門・二水門が開かれた。北月城上には廊六四二間・敵樓二六箇所が設置され、二門・四暗門・二水門が開かれた。⁽⁸⁷⁾ 月城は甕城とも呼ばれ、本來は防城上での弱點である城門部分の防禦を強化するために、城門外を半月形等の小規模城壁で圍繞するものであるが、ここに見える南北兩月城ははるかに規模の大きな、事實上は羅城南北面の外側全體に築かれた外城である。月城に鑿たれた暗門の多さからもそのことはうかがえる。羅城上からの防禦だけでなく、羅城と月城にはさまれた空間に多數の邀撃用兵力を配備し、外敵の不意を突いて出撃することを想定して設けられたのがこれら月城の暗門だからである。とくに閩江に面した南月城に暗門數が多く、南面からの攻撃に對する防禦強化に意が用いられていることが注目される。非常時を強く想定して、きわめて強固な防禦諸施設を完備した城郭の實體をこれほど具體的に知ることが出来る例は、宋以前のものとしては稀有であると言つてよい。ちなみに近年出土した王審知墓誌銘に「重城を創築すること繞廊四十餘里、露屋雲のごとく横たわり、敵樓高く峙^{もも}ゆ。軍民の樂業を保ち、閩越の江山を鎮む」と見えている。⁽⁸⁸⁾ 五代期後半の九四六年、後繼者をめぐる内紛から王氏一族が泉州と漳州で自立した分裂混亂に乗じて南唐が閩を併合した際、福州城の攻防はまず西關が陥され、ついで外郭も陥されながら、「第二城を固守」して二〇數日の閒頑強に抵抗し續け、ついに九月辛丑に至つて「外城再重、皆な唐兵の據る所と爲」つたと見える。⁽⁸⁹⁾ 外城再重とは羅城南北を大きく圍繞する兩月城、第二城とは子城を指すことは明らかである。またこの時期には西關だけでなく、東關の存在も知られる。⁽⁹⁰⁾ 羅城南北外には月城が設けられ城門防禦はほぼ完璧であるのに對し、東西面の主要城門の防禦強化策がこれら東西關であることは言うまでもない。唐末以降、江南各地の主要城郭が群雄の本據として擴張増修される諸例中で、具體像が最も詳細に判るのが王氏閩の本據福州城である。

(29) 建 州 城

唐中期の建中元年（七八〇）に、建州刺史陳長源によって城周九里三四三步・城高二丈・基厚一丈二尺・城門九の州城が再建された。これ以前の規模等については不詳である。唐末天祐年間（九〇四～〇七）に、刺史孟威が南羅城を添築している⁽⁹¹⁾。ついで九四一年に、さらに増築されて城周二〇里と舊に倍する大規模なものとなった⁽⁹²⁾。第五代閩主王延義と對立した弟の建州刺史王延政の手になる大増築である。王延政はついで建州を以て自立して殷と號し、王延義弑害後に第六代閩主となる人物である。閩の内紛による自衛策としての増築であり、やはり軍事目的を第一義としたものである。羅城内には城周四里・城高一丈八尺・基厚一丈の子城がかつて存在しており⁽⁹³⁾、創建時は不明ながら、建中以前の建州城である可能性がある。

(30) 桂 州 城

唐初武德五～六年（六二二～二三）に桂州總管李靖によって漓江西岸に城周三里餘・城高一丈二尺の城郭が築かれた。その後、大中年間（八四七～六〇）に桂管都防禦（觀察）使蔡襲が外羅城を築き、唐初以來の州城は取り込まれて子城となった。唐末光啓年間（八八五～八八）には桂管觀察使陳環によってさらに外羅城西北部に周六～七里の夾城が築かれた。「是れ諸營力を展べ、日ごとに萬人を役し、時ならずして就く。氣色を増崇し、殿めること長城の若し。南北の行旅、皆な此に集る⁽⁹⁴⁾」とあることから、物資集散の一中心として城外の市街地化が進行し、それらの地區を城壁で包攝した城關の如くであるが、増修の背景にはやはり軍事上の要請があったと見るべきである。すなわち、ちょうどこの時期、南詔の攻勢が激化し、北は劍南西川、東は桂管、南は邕管・安南方面で唐朝はもっぱら守勢に立たされていたからであり、劍南西川の使府成都府城がほぼ同時期に全く同じ理由から大増修が加えられている⁽⁹⁵⁾。したがって、唐末における桂州城の擴張増修は、

これまで見てきた自立化を強める内地群雄の本據としての城郭増修とはややその背景を異にするものである。ところで、唐代桂州城の子城・羅城・夾城のおよその平面プランを知る上で恰好の資料が近年知られるようになった。南宋咸淳八年（一二七二）頃に城北鸚鵡山南麓に刻せられた摩崖の「靜江府城池圖」がそれである。南宋末にモンゴル軍に一時攻陥された後、その戦訓から四次にわたって大規模な擴張増修がなされた具體的記録である「靜江府修築城記」に附刻されたのが本圖である。本圖によって、府治を圍繞するのが唐初に築かれた子城を基礎としたもの、その北側に破棄された外羅城の北壁、さらに北側の沕波山沿いに東西に走る城壁が唐末に築かれた夾城線であることが明確に讀み取ることが出来る。第一次の新城（外羅城）建設に用いられた軋は一、〇五四、〇〇〇片、第二次の西郭外城（羊馬城）には六、二三〇、八七〇片、第三次の東郭外石城には四四二、〇〇〇片、第四次の北郭外城には二、九〇八、四一二片の總計二〇、六三五、二八二片の多きにのぼる。⁹⁶これより約三七〇年前の唐末に、王審知が大擴張した福州城で用いられた軋が一、五〇〇萬片であつたから、あらためて福州城の軋城構造の強固さを知ることが出来る。

三 結 語

以上に比較的規模や構造の判る三〇州縣（一鎮を含む）の城郭について検討してきた。地域別に分類すると、唐代一五道別では、山南東道に屬するもの一、淮南道一、江南東道二一、江南西道六、嶺南道一となる。唐後半期の藩鎮別では、荆南一、淮南一、浙西九、浙東八、江西四、宣歙四、福建二、桂管一となる。五代十國の領域別では、高氏荆南一、楊氏吳（のち李氏南唐）一三、錢氏吳越一三、王氏閩二、劉氏南漢一となるが、この分類は最終的な歸屬を示すものであって、唐末五代初期では中小群雄勢力の本據であつたものが過半を占めていることは既述の通りである。

唐末五代期における華中・華南の城郭の規模や構造に關しては、華北のそれと比較してみると、具體的様相が突出して明確になることが明らかとなった。無論、宋元期に編纂された古地志が比較的良く傳わっていること（『永樂大典』等の類

書に引用されるものを含む」といった史料上の偏りがあることは事實であるが、それにも増して、「新築城記」・「修築城記」等の記録が少なからず存していることに依る所が大である。しかもこれらの記録が唐末五代期に集中している點が特に重要である。同時期の華中・華南でのこれに類する記録は本稿で参照したものに數倍、あるいはそれ以上あったと考えられる。華北での同様の記録としては、中和二年（八八二）の題記のある河中府「解縣新城碑」等、ごくわずかが傳わるだけである。華北の五代政權地域と華中・華南の十國政權地域との城郭修築に關する記録の殘存數の多寡は、そのまま當時の北と南での城郭修築の頻度を反映したものと云える。華北での五代政權の興亡、さらには契丹の直接的な軍事介入など、華北でも激しい攻城戰が展開されたことは言うまでもない。にもかかわらず、華中・華南での城郭の修築や増修が格段に頻繁に認められる事實をいかに理解すべきであらうか。

まず第一に、五代政權と異なり、十國政權が互いに國境を接しつつ併存していたこと、従つて隙あらば鄰國領域を侵蝕して自領擴大を窺うという緊張した關係にあつたことが指摘出來よう。四川の前・後蜀は別として、華中・華南では境域を劃すべき確たる地理的境界線が存しない。十國の各國國境線はあくまでも人爲的なものであり、力關係でかなりの變更があり得た。とくに吳（南唐）と吳越との國境は人爲的要因が大であり、この兩國内での城郭の擴張増修の例がとび抜けて多く認められるのはそのことを反映している。

第二には、唐末五代初期において華中・華南で多數の中小群雄が多様な分權化傾向の動きを示したことである。彼等の出自は在地土豪、鄉村自衛集團、群盜からの成り上り、さらには少數民族出身等と多彩であり、黃巢叛亂軍が激しく江南各地を流寇して去つた後の社會的大混亂期に一舉に擡頭してくる。元來、弱少兵力しか保持しなかつた觀察使を配置しただけの唐朝の江南統治體制が完全に崩壊し、軍事的な空白が生じたことが、これら多數の中小群雄の地域割據を可能にしたのであり、とくに江西南部に見られるように、少數民族の自立化の動きは唐朝支配の終焉を象徵するものとして注目される。十國に收斂される以前のこれら中小群雄による地域支配の據點として、彼等が本據とする城郭が並はずれて大々的

に擴張増修されたのである。

第三には、流通經濟の活性化との關連を指摘出來よう。豊かな江南の生産力を背景に、十國の領内振興策と相まって、多様な地場産業が興り、商品物資の流通が盛況を呈するようになった結果、廣域な流通圏が形成され、その中心地となるような州縣城郭では必然的に人口増加をきたし、従前の城郭規模では容まり切れない事態が生じていたのである。

華中・華南における城郭の大規模化については、右の三側面からほぼ説明出來よう。とは言え、やはり軍事的要請に基づくところが最も大きく、まさしく時代性の反映が城郭のあり様に顯著に認められるのである。宋は十國の併合過程で、これら大規模化した州縣城郭の強固な防禦諸施設を撤去するだけでなく、多くは城郭規模の縮小を行なっている。宋朝によるこのような州縣城郭の規模の「適正」化は、内亂防止策であるとともに、均一で小さな地方行政に立脚した文官支配體制の貫徹という統一後の統治原則と無關係ではなからう。

註

- (1) 拙稿「唐代太原城の規模と構造」(唐代史研究會編『中國における都市の歴史的研究』所收 一九八八 刀水書房)參照。
- (2) 拙稿「唐代の揚州城とその郊區」(梅原郁編『中國近世の都市と文化』所收 一九八四 京都大學人文科學研究所)參照。
- (3) 『元和郡縣圖志』卷一三太原府文水縣條。
- (4) 賈耽『郡國縣道記』(『漢唐地理書鈔』所收)。
- (5) 『舊唐書』卷三九地理志一 荊州江陵縣條、『輿地紀勝』江陵府條所引『元和志』逸文。
- (6) 『太平廣記』卷一九七江陵書生條(出『玉堂閒話』)。
- (7) 『資治通鑑』卷二五三乾符五年(八七八)正月條。
- (8) 『舊五代史』卷一三三、『新五代史』卷六九高季興傳、『通鑑』卷二六八乾化二年(九一二)閏五月、同卷二七一龍德元年(九二一)十二月條。
- (9) 宋周羽翀撰『三楚新錄』卷三。
- (10) 『全唐文』卷八六八殷文圭「後唐張崇修廬州外羅城記」。
- (11) 『通典』卷一五二兵典五 守拒法條「弩臺、高下與城等、去城百步、每臺相去亦如之。下闊四丈、高五丈、上闊二丈、上建女牆。臺內通閣道、安屈膝梯、人上便卷收。中設甌幕、置弩手五人、備乾糧水火。」
- (12) 『通鑑』卷二六七後梁開平二年十一月條、前揭「修外羅城

記」。

(13) 『通鑑』卷二六八後梁乾化三年十月・同卷二六九同年十二月條、前掲『修外羅城記』。

(14) 『元和志』卷二五潤州條、『嘉定鎮江志』卷二城池條。

(15) 『新唐書』卷一七九王璠傳。

(16) 『通鑑』卷二五六光啓三年三月條、『嘉定鎮江志』卷二城池條。

(17) 劉建國「晉陵羅城初探」、鎮江博物館「鎮江市東晉晉陵羅城的調查和試掘」(『考古』一九八六一五)。

(18) 『至順鎮江志』卷二城池條。

(19) 『通鑑』卷二八一後晉天福三年五月條。

(20) 同右卷二五七光啓三年十一月條「趙暉據上元、(中略)治南朝臺城而居之。(胡注)隋之平陳也、悉毀建康臺城、平蕩耕墾、更於石頭城置蔣州。唐廢蔣州、以其地隸潤州。光啓二年、復置昇州、治上元縣。蓋臺城之堙廢久矣。」

(21) 同右卷二七八後唐長興三年八月・四年五月條、『景定建康志』卷二〇城闕志一。なお『通鑑』では城周を「二十里」に作る。

(22) 同右卷二八一後晉天福二年正月條。

(23) 『咸淳毗陵志』卷三城郭條、南京師範學院地理系江蘇地理研究室編『江蘇城市地理』(一九八二)江蘇科學技術出版社所載地圖參照。

(24) 『通鑑』卷二九三後周顯德三年三月條。

(25) 『嘉靖江陰縣志』卷一城池條所引「祥符圖經」。

(26) 『通鑑』卷二六七後梁開平二年九月條「吳越將張仁保攻常

州之東洲、拔之。(胡注)宋白曰、通州海門縣東南、隔水二

百餘里、本東洲鎮。』同卷二六八後梁乾化三年三月條「(吳越)將水軍攻吳東洲、以分其兵勢。(胡注)東洲、即常州東洲也。』同卷二七〇後梁貞明五年三月條「(錢鏐)自東洲擊

吳。(胡注)自常州東洲出海、復泝江而入以擊吳。』

(27) 『元和志』卷二五蘇州條。

(28) 『乾道臨安志』卷二城社條所引「九域志」、魏嵩山「杭州城市的興起及其城區的發展」(『歷史地理』創刊號 一九八一)、斯波義信「宋都杭州の商業核」(梅原郁編「中國近世の都市と文化」一九八四、のち「宋代江南經濟史の研究」所收 一九八八 汲古書院)。

(29) 『通鑑』卷二五九景福二年七月條、『咸淳臨安志』卷一八城郭條、『吳越備志』卷一武肅王條。

(30) 『夢溪筆談』卷一三權智條、『吳越備志』同前條。

(31) 『元豐九域志』卷五兩浙路杭州條。

(32) 『文苑英華』卷八一羅隱「東安鎮新築羅城記」。

(33) 前掲「新築羅城記」、『通鑑』卷二六〇乾寧二年十月條。

(34) 『嘉泰吳興志』卷二城池條、『永樂大典』卷二二七六所引「吳興續志」。

(35) 『文苑英華』卷八〇八。

(36) 『通鑑』卷二六一乾寧四年九月條。

(37) 『武經總要』「白露屋、以江竹或榆柳條編、如窮廬狀、外塗石灰、有門有窺、中容一人、以爲候望。每敵樓戰棚上五間置一、折於兩傍、施木柜馬篋籬笆、隱人於下、持泥漿麻搭、以備火攻。」

- (38) 『嘉泰吳興志』卷二城池條、『永樂大典』卷二二七六所引『吳興』統記。張國淦『中國古方志考』(一九六二中華書局)に據れば、『吳興統記』は北宋景德元年序であり、唐五代期の記事についての資料価値は高い。
- (39) 『元和志』卷二五睦州條、『全唐文』卷二〇〇沈成福「議移睦州治所疏略」。
- (40) 『通鑑』卷二五六中和四年末條。
- (41) 『淳熙嚴州圖經』卷一城社條「羅城、周回十二里二步。(注)刁衍大廳記云、陳戢築羅城。按舊經、周回十九里、高二十五尺、闊二丈五尺。今城、宣和三年、平方臘後、知州周格重建。」子城、周回三里。」
- (42) 『通鑑』卷二六五天祐二年十二月條。
- (43) 『嘉泰會稽志』卷一城郭條。
- (44) 『通鑑』卷二六〇乾寧三年五月條。
- (45) 『嘉泰會稽志』卷一城郭條。
- (46) 光緒十九年(一八九三)測繪「紹興府城路衢圖」(魏仲華・徐冰若主編『紹興』中國歷史文化名城叢書之一 一九八六 中國建築工業出版社)。
- (47) 『嘉泰會稽志』卷一二諸暨縣條。
- (48) 同右同卷新昌縣條、『萬曆新昌縣志』卷一建置志城池條(天一閣藏明代地方志選刊第一九冊)。
- (49) 『唐文拾遺』卷三〇崔耿「東武樓碑記」。崔耿は會昌元三年(八四一―四三)の間の衢州刺史である。
- (50) 『通鑑』卷二六五天祐元年十一月條。
- (51) 『讀史方輿紀要』卷九三衢州條。
- (52) 『嘉靖溫州府志』卷一城池條(天一閣第一七冊)。
- (53) 『嘉定赤城志』卷二地里門城郭條。
- (54) 『唐會要』卷七一州縣改置下、『寶刻叢編』卷一三「唐移州城記」。
- (55) 『乾道四明圖經』卷一城池條、『寶慶四明續志』卷三城郭條。
- (56) 同右同條。
- (57) 『寶慶四明續志』卷一八定海縣條。
- (58) 『通鑑』卷二五六光啓元年正月條、『永樂大典』卷八〇九三贛州府條所引「贛州府圖經志」。
- (59) 『永樂大典』同前所引「章貢志」。前掲『中國古方志考』に據れば、本書は紹定元年(一二三二)以後の纂修である。
- (60) 『新唐書』卷一九〇・『新五代史』卷四一盧光稠傳、『通鑑』卷二六三天復二年十二月、同卷二六七後梁開平三年八月・同四年正月・同年十二月條。
- (61) 『通鑑』卷二七〇後梁貞明四年七月・同年十一月條。
- (62) 『永樂大典』卷八〇九二袁州府城條所引「嘉定宜春志」。
- (63) 同右。揭鎮の出自は不詳。在地の土豪あるいは少數民族か。揭姓はきわめて珍らしい姓であり、葛・楊・揚等の誤記とも考えられる。但し、嶺南潮州の地は漢代の南海郡揭陽縣であり、『漢書』卷二八下地理志、『元和志』卷三四、『元和姓纂』卷一〇・一七薛・揭陽條に「漢功臣安道侯揭陽定之後、今因官氏焉」と見える揭陽氏と關連があるかも知れない。袁州からは、吉州・虔州を経て潮州まではさほどの距離ではない。

- (64) 同右。
- (65) 『通鑑』卷二六五天祐三年十二月・同卷二六六後梁開平元年五月・同卷二六七開平三年六月條。
- (66) 同右卷二六七後梁開平三年七月・八月條。
- (67) 前掲『嘉定宜春志』。
- (68) 同右。
- (69) 『全唐文』卷八七六劉仁贍「袁州廳壁記」。
- (70) 『永樂大典』卷八〇九二袁州府城條所引。
- (71) 同右卷八〇九二撫州府城條所引張保和「唐撫州羅城記」・同人「新移撫州子城記」・危全諷「重修撫州公署記」、同卷一〇九四九撫州府條所引『淳熙・嘉定（臨川）志』。
- (72) 『新五代史』卷四一鍾傳傳、「通鑑」卷二五五中和二年七月・同卷二六二天復元年十二月・同卷二六六後梁開平元年十二月・同卷二六七開平三年六月・七月條。
- (73) 『永樂大典』卷八〇九一建昌府條所引『紹興盱江前志』、『全唐文』卷八一九刁尚能「唐南康太守汝南公新規撫州南城縣羅城記」。
- (74) 『元和志』卷二八宣州條。
- (75) 『通鑑』卷二五八龍紀元年七月條。
- (76) 同右卷二九三後周顯德三年三月條「初、柴克宏爲宣州巡檢使。始至、城塹不脩、器械皆闕。吏云、自田頔・王茂章・李遇相繼叛、後人無敢治之者。克宏曰、時移事異、安有此理。悉繕完之。由是路彥銖攻之不克」。陸氏「南唐書」列傳卷三柴克宏傳ほぼ同文。
- (77) 『嘉靖寧國府志』卷七防圍紀條所引「韓熙載記」、『全唐文』卷八七七韓熙載「宣州築新城記」、『安徽金石略』卷三「南唐宣州築新城記」。
- (78) 『新安志』卷一城社條。
- (79) 『文苑英華』卷八一「楊夔「歙州重建新城記」。
- (80) 『元和志』卷二八歙州婺源縣條。
- (81) 『新安志』卷五婺源縣城社條、「全唐文」卷八七一劉津「婺源諸縣都制置新城記」。
- (82) 『元和志』卷二八池州條。
- (83) 『唐文粹』卷七三竇滔「池州建大廳壁記」。
- (84) 『舊唐書』卷一八二秦彥博、「通鑑」卷二五五中和二年十二月條。
- (85) 『淳熙三山志』卷四子城條。
- (86) 『通鑑』卷二五六中和四年十二月條。
- (87) 『黃（滔）御史公集』卷五「靈山塑北方毗沙門天王碑」、『淳熙三山志』卷四子城・羅城・夾城條。王審知が福州新城の竣工に際して毗沙門天像を造って城北の靈山開元寺に奉安したことを記したのが本碑の主内容である。毗沙門天は須彌山北面に住して閻浮提の北方を守護する四天王の一で、唐代には所謂城隍神として城郭北方に配される例が他にも知られる。例えば『舊唐書』卷一六穆宗紀長慶三年十一月條に「上御通化門、觀作毗沙門神、因賜絹五百匹」と見える。長安城北面は大明宮城及び禁苑で北壁諸門は一般の通行は原則として許されていなかった。したがって東壁最北の通化門上に守護神として安置されていたのである。
- (88) 福建省博物館・福州市文管會「唐末五代閩王王審知夫婦墓

- 清理簡報」(『文物』一九九一一五。福州市の慶城寺閩王祠に現存する有名な「王審知德政碑」(『金石萃編』卷一一八等)には、彼の福州城増修について「立崇墉之百雉、表巨屏於一方。巖邑湯池、曾何足數。折筋縈帶、固不可憑。」とあるだけである。ところで、羅城規模について「天王碑」に城周二六里と言ひ、『淳熙三山志』に四〇里、新出「墓誌」に四〇餘里としている點であるが、羅城本體は二六里で、南北兩月城を含めて四〇里と解するのが妥當であらう。
- (89) 『通鑑』卷二八五後晉開運三年八月戊寅・九月辛丑條。
 (90) 同右卷二八四後晉開運二年四月條。
 (91) 『嘉靖建寧府志』卷七城池條(天一閣第二七冊)。
- (92) 『通鑑』卷二八二後晉天福六年正月條、同右『嘉靖建寧府志』同條。
 (93) 『嘉靖建寧府志』卷二〇古蹟條。
 (94) 『桂林風土記』(光化二年序)衛國公李靖・夾城條、『讀史方輿紀要』卷一〇七桂林府桂林故城條。
 (95) 嚴耕望「唐五代時期之成都」(『嚴耕望史學論文選集』所收 一九九一 聯經出版事業公司) 參照。
 (96) 桂林市文管會「南宋《桂州城圖》簡述」(『文物』一九七九一二)、馬崇鑫「試論桂林宋代摩崖石刻《靜江府城池圖》在地圖史上的意義」(『歷史地理』第六輯 一九八八)。

別表

城市名	城郭構造	城周	城(尺)高	城(尺)闊	濠(尺)	城門	その他	築年	備考	出典
京兆府奉天縣子城	城	五里四〇步	二二	下上二二〇	闊深三〇八			乾祐重修		元和志元唐會要公通鑑三六
華州羅城(外城)	城	一里	二二	下上二二五	闊深三〇八		東西城	建中元 ₈₈₀		元和志元 ₈₂₄ 天復三 ₉₀₃ 修通鑑三六
靈州定遠城	羊馬城	一四里						開元中 ₇₁₃₋₄₁	軍鎮	元和志元

以上關内道

— 57 —

交州	容州	桂州
子羅城	內城外城	夾外子城
	二里二六〇步	六〇七里
一一		一一
三		四
		外城西北
元和四〇九年增修 (咸通四〇〇)	貞元一七	武德中六三〇—六三六 大中年間增築 八四七—八五〇 光化年間 八九八—九〇〇
唐會要 三 通鑑 三〇	樊川集 七 英華 八七 大典 三三九	昌黎文集 二五 歷史地理 六 文物 一七九上 同右 同右 桂林風土記

以上劍南道

羊馬城	羅城	羅城	廣子城	牙外城郭
四二里	三三三	二五里		
一七	四四	二六		
下上 二一七	三尋	一〇		
		二六里	無濠	
羅城正南門	羅城正南門	羅城正南門	羅城正南門	羅城正南門
碧金雞坊	碧金雞坊	碧金雞坊	碧金雞坊	碧金雞坊
咸通一一 (中和四〇〇)	咸通一一 (中和四〇〇)	咸通一一 (中和四〇〇)	咸通一一 (中和四〇〇)	咸通一一 (中和四〇〇)
羅城正南門	羅城正南門	羅城正南門	羅城正南門	羅城正南門
同右 三四	同右 三四	同右 三四	同右 三四	同右 三四

羅城	三〇〇〇步 (八・三里)					造屋四〇餘萬 咸通七 ₈₆₆	高駢	同右 _{二五}
----	-----------------	--	--	--	--	------------------------------	----	------------------

以上嶺南道

涼州	庭州
大城	府城
二〇里	外城
箱各	羊馬城
一〇〇〇步(二里二八〇步)	四五九六米 (八・二里)
	殘高三 三〇五米
	上二〇五米 下五〇八米
	有馬面
	北門外
城不方、 俗稱鳥城	
臥龍城	
本匈奴所築	
(至德一 ₇₅₆)	
東北七里	北庭都護府城
東西三里	元和志 _四
王隱 _{晉書}	元和志 _四
元和志 _四	通鑑 _{三九}
	考古 _{一九二二}

以上隴右道

荊州府	南	北	外	子	羅	歸州	興山縣	夔州
城	城	城	郭	城	城	縣	縣	城
一八里								七里
								因江爲池
			南門外壘城					
			城下舊 三〇萬戶			南臨大江		
			(乾符五 ₈₇₈) 龍德元 ₉₀₁			相傳劉備城		
			王仙芝攻			高氏增修		
興地紀勝所引 元和志逸文	通鑑 _{二五}	同右 _{二七}	廣記 _{一七}			紀勝所引 元和志逸文	同右	通鑑地理通釋 元和志逸文

胤山縣	葭萌縣	利州	梁州 與元府	隨州	郢州	復州	內鄉縣	鄧州	臨漢縣	襄州	金州	澧州	
三面有城	縣城	小大城城	北城 大城·小城 四二里		州城	州城	縣城	牙城	縣城	中人城 (縣東邊 西北角)	州城	新城	
												東垣百四 (二四〇·二六步)	
										里繞城堤四三			
				南門									
築城	南面因險不更			隨國城	吳牙門戍城								
武德四			漢·北魏 (大和二八二)				楚	(天福六)				乾元以前	北周 建德五
								安從進攻					
同右三	同右三	元和志三	水經注 通鑑二四	同右三	同右三	同右三	元和志三	通鑑二六	元和志三	英華八〇	元和志三	紀勝所引 元和志逸文	全唐文六元
													集古錄目一〇

以上山南道

壽州	鹽池縣	楚州	揚州	景谷縣	鳳州	河池縣	興州	成州	文州	巴州	恩陽縣	果州	渠州	鄰山縣
金相外國城郭	久無城邑	倉城 內城 (東南接州城)	子羅城城	削山爲城	縣城	縣城	三面周匝	州城	州城	縣城	縣城	郭(州城)	縣城	縣城
			四〇里 實測一八〇〇米				五〇〇許步							
		南門 月城	七七八				唯開西北一門							南北三面有 池園繞
			複郭	城三角					移於故城東四 里高原上					
		隋末築		五胡期				五胡期	建中二七三					
		咸通元(860) (顯德四957)												
		隋平陳時												
		英華八三 通鑑二九三												
水經注三	舊志四	紀勝所引 元和志逸文		同右三	同右三	同右三	同右三	元和志三 舊志四	元和志三	紀勝所引 元和志逸文	同右	同右	同右	同右

盧州	子羅城
步二六里一七〇三〇	
闊深 六七八 〇〇〇 ? ? ? 一三	
天祐六年擴	
全唐文 八六	通典 二一

長城縣	湖州	杭州	華亭縣	蘇州	義興縣	無錫縣	江陰縣	
子城	羅城	內城		小大外郭城		四郭		外羅城
	二四里 二·一里	三六里九〇步 七〇里	一六〇丈	四七里 四五里三〇步 八里二六〇步 四七里 一〇里	一里九〇步	二里一九步 一一里二八步一七	一三三	七里三〇步 二八 二七三三七步二〇
			一二		一二	二七		二〇有餘
			九·五					二〇
					闊三五			
六	九			八(水門) 八(水門)			四	
故曰長城								
武德七 ₆₂₄	武德四 ₆₂₁	隋代 景福一 ₈₉₃ 開平四 ₉₁₀	天寶一〇 ₇₅₁ 新置		孫吳 大業初重修		天祐一〇 ₉₁₃	順義中 _{921~96} 天祚一 ₉₃₆ (顯德二 ₉₅₆)
		錢氏築 擴張	宋城か?					
嘉泰吳興志	嘉泰吳興志 英華 _{三六〇八} 大典 _{三七六}	淳祐臨安志 通鑑二 _五 同右 _{二六七} 夢溪二 _三	紹熙雲間志	吳郡志	咸淳毗陵志	咸淳毗陵志所 引南徐記	嘉靖江陰縣志	咸淳毗陵志 通鑑二 _{九三}

處州	衢州	婺州 浦陽縣	新昌縣	剡縣	餘姚縣	諸暨縣	越州	新安縣	睦州	武康縣	安吉縣
	羅城						子牙外城郭	外城	羅城		無城郭
		一里二四〇步	一〇里	一二里	一里二五五步	二里四八步	一〇里	二里二五步	四〇〇步 一九里		
		二三	一〇	一〇	一〇	一六			二五		
		二三	二三	二〇	二〇	一〇			二五		
							迎恩門 (西門)				
貞元六 北移四里											
	(天祐元904)	天寶一三754	開平一908	武德中	孫吳	開元中 唐末增修	隋代 (乾寧一895) (同二895)	建安一三208	萬歲通天一597 以前 中和年間 881~85	廣德一764	
元和志三六	通鑑三三	嘉靖浦江志略	萬曆新昌縣志	嘉泰會稽志	刻錄	同右	嘉靖會稽志	同右 嘉靖新安志	全唐文二〇〇 元和志三五 淳熙嚴州圖經	同右	同右

撫州	袁州	江州	虔州	饒州	建昌縣	洪州	黃梅縣	贛州	吉陽縣	安州
羅子城	羅城	羅城	羅城	中北南城	縣城		縣城			
一五里	四八四步 一五〇〇餘丈 (八里二〇步)			四里六二步				一八四〇步 (五里四〇步)		
(二四 四六尺)				二〇				三〇		
下二五										
下闊二五	開關濠塹	七〇								
八						四				
	添築			三城		關開廣衛七里			漢·梁故城	三重城
光啓三	武德四 乾寧二 保大二	貞觀八	唐末	貞觀八	孫吳	(貞元一四)	晉代	(貞元一六)		
光啓二	光啓二	光啓二	光啓二	光啓二	光啓二	光啓二	光啓二	光啓二	光啓二	光啓二
大典	全唐文	大典	元	大典	元	英華	英華	英華	同右	元
〇元	文	〇元	和志	〇元	和志	韓愈集	韓愈集	韓愈集	韓愈集	韓愈集
〇元	文	〇元	和志	〇元	和志	韓愈集	韓愈集	韓愈集	韓愈集	韓愈集

南城縣	羅城	一三里	二雉	一六	一〇	大順二 ₈₉₁	同右 _{八元一}
南豐縣	無城堞						正德建昌府志
宣州州城	新舊城	共長 一〇里二九步			深三〇 長八九四丈	俗傳晉代築 南唐末 ₈₉₃	元和志元 全唐文 _{八七}
繁昌縣	無城垣					昭宗期新置	元豐類稿 _{一七} 安徽金石略 _五
歙州	羅子城	一里四二步 四里二步 九里七步	一八 一二八	一三・五		大中九 ₈₅₅ 中和三 ₈₈₃ 中和五 ₈₈₅ 光化中 ₈₉₈₋₉₀₁	新安志 同右 英華 _{八二}
婺源縣	縣城	一〇里 九里三〇步	一八			開元二六新置 昇元一 ₉₃₈	元和志元 全唐文 _{七二} 新安志
池州	州城					東西兩市	元和志元 唐文粹 _三
潭州					碧湘門 (西北門) 清泰門 瀏陽門 (東門) 醴陵門 (東門)	中和三 ₈₈₃ 再建 (天福一一 ₉₄₇) (乾祐二 ₉₅₀) (廣順一 ₉₅₂)	通鑑 _{二七} 同右 _{二六} 同右 _{元一}

汀州	建州	福州				道州	連州	彬州	常寧縣	衡州
子羅城	南羅城	新北宮	西郭	外城再重	子羅城	子大城		州城		州城
	四里				四〇里 二三三歩	二六里				
	一八				二〇					
	一〇				一七					
	闊五〇							東府潭水 西枕宜江		東傍湘水 北背蒸水
	九	東武門			水門三 一六	水門三 八				通門
					南北夾城	南北月城		舊城三角		
大曆四 ⁷⁸⁸ 大中元 ⁸⁴⁵	建中元 ⁷⁸⁸ 天祐中 ^{904~07} (天福六 ⁹⁴¹)	天復元 ⁹⁰¹ 中和中 ^{892~95} (開運二 ⁹⁴⁶) (天福五 ⁹⁴⁰) (天福八 ⁹⁴³) (開運二) (天福四) 天福五					元徽年間 473~477			大中四 ⁸⁵⁸
移築										
大典 七 ⁹¹⁶	通鑑 二六二	嘉靖建寧府志	同右 二六二	同右 二六二 同右 二六三 同右 二六五	淳熙三山志 通鑑 二六五	黃御史公集 五	元和志元	大典 二二〇 ⁹⁰⁶	元和志元	金石錄補 二〇

THE ENLARGEMENT OF THE CITY-WALLS IN CENTRAL AND SOUTH CHINA IN THE LATE TANG AND FIVE DYNASTIES PERIOD

OTAGI Hajime

This paper represents an attempt to explicate one aspect of the epoch-marking transition between late Tang and Song, by collecting evidence on the scales and structures of certain prefectures/districts city-walls. Nearly all the walled cities at prefectural level were on about the same scale, as were nearly all walled cities at the district level. That is, the prefecture city-walls generally had a girth of 10 li, and district ones 10 li and under. In the late Tang and Five Dynasties period, however, cities in Central and South China whose walls were enlarged and rebuilt to a circumference of 20 li or even larger and fitted with stubborn defense works appear successively in the historical record.

Most of these cities had their walls repaired and enlarged by regional commanders who took them as their headquarters in the late Tang. As weaker commanders were gradually weeded out in the process of the rise of the Ten Kingdoms, they were rebuilt as strategic points within the kingdoms. That such examples are almost entirely absent for North China under the regimes of the Five Dynasties but occur solely in Central and South China, truly reflects the disunity of the times, and cannot be entirely explained without taking into consideration the geographic conditions of Jiangnan region. In the absorption of the Ten Kingdoms into Song dynasty, most of these enlarged city-walls were dismantled and rebuilt on a smaller and more 'appropriate' scale.